

## 50 ドル札

ルベンは、たいそう心配そうな、そしてうちひしがれた顔をして大学のカフェテリアに座っていました。彼は独りぼっちで、あまり食欲もないように見えました。そのとき、ヨランダが入ってきました。彼女は、ルベンと同じ心理学部の友だちでしたが、何日も授業で彼を見ることはありませんでした。彼女は友だちのルベンを見かけると、とてもうれしくなってテーブルに近づいて行きました。

「こんにちは、ルベン。久しぶりね。」

「やあ。」ルベンは、沈んだ声で彼女に返事をしました。

ヨランダは、彼に何かあったということに気がつき、思い切って彼に尋ねました。

「何かあったの？」

ルベンは答えたくはなかったのですが、ヨランダはしつこく聞きま

した。「言ってよ。何かあったんでしょ。」

長い沈黙のあと、彼は話し始めました。

「今週、レストランのアルバイトを首になったんだ。お金もないし、両親にまた頼みたくはないんだ。」と、ルベンはほとんど顔を上げずに言いました。そのときヨランダは、財布から50ドル札を取り出して、ルベンにそれを見せました。

「これ、ほしい？」

「いや、結構だよ。ヨランダ、ありがたいけど、それじゃ解決にはならないんだ。僕にはもうたくさん借金があるし、しかもそれがすべてじゃないんだ。」

「あなたは私の言っていることがわかっていないわね、ルベン。」ヨランダは、50ドル札を手を持って言い返しました。しかし、ルベンは話を続けました。

「シルビアとの関係も終わったんだ。はじめはとっとうまくいって、今まで持っていたどの関係とも違っているように思えた。でも結局は、どの関係とも同じように終わったんだ。この前、彼女から電話があって、しばらくのあいだは離れていたいってぼくに言ってきたんだ。」

友だちとしてつきあっていくことができるわって。ぼくにはわからない。今回はどこで失敗したんだ。」と、ほとんど泣きながらルベンは言いました。

ヨランダは、50ドル札をぐしゃぐしゃにして、再びルベンに差し出しました。

「で、今でもまだほしくない？」ルベンはかなりびっくりしました。

「あのね、50ドル札のままだよ。でも、君が荷をしようとしているのかわからないよ。それじゃ解決にならないって言っただろ。」そして、ルベンは話を続けました。

「レストランの問題やシルビアのことやらなんやらで、心理学のレポートを終わらせる時間がなかったんだ。先生は、僕には単位をくれないだろうね。」

ヨランダはぐしゃぐしゃの50ドル札をコーヒーカップの中に入れて、それを絞って足で踏みつけ始めました。しばらくして、靴の下からお札を取り上げて、それを伸ばして再びルベンに差し出しました。

不思議なことに、お札は破れてはいませんでした。お札が受けたあらゆる災難にもかかわらず、いつものように50ドルの価値を持ち続けていました。

突然ルベンは、ヨランダが50ドル札で彼に言いたかったことが理解できました。すると、彼の顔にはわずかばかりのほほえみが浮かびました。

「ありがとう、ヨランダ。わかったよ。僕が必要としていることはこのことだったんだね。」と、ルベンは言いました。

「取っておいて。1年前、わたしも今の君のようだったの。そして、わたしも同じように50ドルをもらったわ。」とヨランダは優しく言うと、去って行きました。